

## 「短歌研究」九、十月号より 黒岩剛仁

過日、短歌研究社のパーティーに出席した。そこでは、中堅からベテランの歌人に与えられる短歌研究賞、評論公募の賞である現代短歌評論賞と並んで、短歌研究新人賞の授賞式も行なわれ、フレッシュな新人と出合える場でもあるため、毎年楽しみに参加しているのだ。

今年の受賞者は、馬場めぐみ。短歌を読み始めてまだ三年ほど（作るようになったのは、もつと最近のことだそうだ）という、結社にも所属していない二十代半ばの大学生だった。しかしながら、受賞の挨拶は堂々としていて、短歌と向き合う姿勢についてしっかりと語り、「心の花」に入会してちょうど三十年になる私など、何だか漫然と歌を作ってきたようで恥ずかしく思われた。「短歌研究」十月号に発表された受賞後第一作にも、いい歌があった。三首だけ引く。

・甘ったれのまま突き進む度胸さえ持てない喉に絡みつくカルピス  
馬場めぐみ

・女閨の人影と化し明朝の晴れを待つ父のゴルフバッグ  
・玄であることを恥じないでいたいから陽を受けながら両足で立つ

定型にきちっと収まっていないという憾みはあるものの、私が九月号のこの欄で「輪郭のある事物を詠み込みながら、実感に根

ざした作品を生み出している人たちもいる」として名前を挙げた、屋良健一郎や大森静佳に続く新人歌人が誕生したのだな、との思いを強くした。

さて、馬場の受賞が発表された「短歌研究」九月号掲載の読み物なので、ちよつと時間が経ってしまった話題ではあるが、関川夏央と三枝昂之の特別対談「子規をめぐる青春群像」が面白かった。面白かった点を二、三挙げると……

関川が生み出す作品では、石川啄木が銭湯で夏目漱石と一緒になったり、古書店で芥川龍之介とぶつかったりするのだが、そのことについて、「まあ、フィクションですから。ありえなくもない状況を設定する自由はあるわけです。当時は東京十五区、百六十万ぐらいの人口で、いわゆる知識階級が住むのが牛込と本郷ぐらいとなります。東京はとても狭いわけです」と自説を開陳。

また、正岡子規についても関川は述べる。

（前略）多弁な人ですから、もし元気で出歩いていたら、うるさがられたかもしれない。ひとつ所から動けない。そこに行けば子規に会える、逆に、行かなければ会わなくてもいいというふうな条件が子規の魅力を倍加したんじゃないですかね。

そして、病床の子規を中心とするサロンが生まれ、それこそが現在にも繋がる歌会の原型なのだ、とも。

さらに、啄木について、「どんなに口語に近づけても最後のところでは文語に踏みとどまっている。あの兼ね合いは奇妙にいいんですね」と指摘した上で、「（啄木にとって短歌は）第二志望だから大胆で自由なんです。（中略）下宿代の催促が始まる直前になると歌ができるんですよ、あの人。だから毎月二十日をすぎると多産になります」と、興味深い話も披露しているのである。